

広島芸術学会活動報告

二〇〇七年七月～二〇〇九年六月

米 門 公 子

▼平成十九年七月一日(日)

会報第九十三号を発行。巻頭ページに第二十一回総会・大会のスケジュールを掲載。続いてシンポジウムの趣旨(執筆・松田弘)、筆奏者・木原朋子氏のプロフィール、四つの研究発表の要旨を掲載した。第七十九回例会(野外・尾道散策)の報告は大山智徳が執筆した。

▼平成十九年七月二十八日(土)

第二十一回総会・大会を広島県立美術館・地階講堂で開催した。九時三十分、総会の初めに金田晋会長が挨拶を述べ、議事に入った。平成十八年度の事業報告、決算報告、監査報告がそれぞれの担当委員からなされ、いずれも承認された。引き続き、平成十九年度事業計画、予算案が発表され、そのまま承認された。

十時から大会を開始。午前中に研究発表①「日本近世における養生思想について―貝原益軒『養生訓』を中心に―」(広島大学大学

院生・福光由布)②「ジョルジュ・ド・ラ・トゥール作『聖ヨセフの前に現れたる天使』について」(ふくやま美術館学芸員・平泉千枝)が行われた。昼休憩をはさんで③「1930年代中盤のハイデッカーにおける *ambigu* の問題―感性の在処と美への問い―」(同志社大学大学院生・近岡資明)④「アレクサンドル・チュレブニンについての研究―中国と日本における活動を中心として―」(エリザベト音楽大学大学院生・王文氏)が行われた。

エンターテイメントとしてエリザベト音楽大学・木原朋子氏の筆演奏を鑑賞した後、シンポジウム「美術作品と場所」を開始した。

趣旨説明は広島県立美術館総括学芸員の松田弘、続いて四つの事例①「岡本太郎『明日の神話』」(前広島市現代美術館副館長・竹澤雄三、ギャラリスト・木村成代)②「広島市立大学芸術学部の一連の展示活動」(広島市立大学・前川義春)③「広島平和記念公園とその周辺の作品」(広島市現代美術館・松岡剛)④「岡部昌生『第52回ヴェ

ネチア・ビエンナーレ日本館の展示」(アーティスト・石丸勝三)が発表され、その後事例発表者によるパネルディスカッションが行われた。司会は松田弘が務めた。総会・大会の参加者は六十七名。

▼平成十九年九月五日(水)

会報第九十四号を発行。巻頭言は松岡剛の「展示の空間」。広島芸術学会第二十一回大会報告として、福光由布の発表を陳貞竹が、王文氏の発表を上野仁が報告した。また、井野口慧子が木原朋子氏の箏演奏と現代箏曲についての覚書を寄せた。最終ページに第八十回例会案内を掲載した。

▼平成十九年九月二十二日(土)

第八十回例会は初の試みで大衆演劇の鑑賞。広島市南区に古くからある清水劇場で「劇団花吹雪」による芝居『男の花道』と舞踊「宝塚シヨ」を愉しんだ。参加者は十六名。

▼平成十九年十一月二十日(火)

会報第九十五号を発行。巻頭言は大井健地の「永徳が描いた信長の顔」。第九十四号に未掲載だった大会報告を掲載した。平泉千枝の研究発表を船本菜穂子が、近岡資明の発表を片山理美が報告、シンポジウムについては福光由布が報告した。最終ページに第八十一

回例会案内を掲載した。

▼平成十九年十二月八日(土)

第八十一回例会を広島県立美術館講堂で開催した。一つ目の研究発表は郵政事業会社・大山智徳の「《性格のない人間》における身体の一考察―R・ムージルの小さな物語をめぐる―」。二つ目は広島県立美術館・永井明生の「画家の残したスケッチブック―児玉希望に関する新出資料紹介」。参加者は十八名。

▼平成二十年二月十五日(金)

会報第九十六号を発行。巻頭言は山本一隆の「インドの光と影」。第八十一回例会報告は大山智徳の発表を柿木伸之が、永井明生の発表を菅村亨が書いた。最終ページに第八十二回例会案内を掲載した。

▼平成二十年三月八日(土)

第八十二回例会をひろしま美術館講堂で開催した。研究発表の一つ目は、広島市立大学大学院生・山浦めぐみの「湿潤の風土に培われた日本絵画の空間性―《雲》は何故描かれ続けたか」。二つ目の発表は、ひろしま美術館学芸員・水木祥子の「ゴッホの農民画について―ミレーの影響を中心に」。参加者は二十名。

▼平成二十年四月三十日（水）

会報第九十七号を発行。巻頭言は一鍬田徹の「サイト・スペシフィック+ヒロシマ」。第八十二回例会報告は山浦めぐみの発表を松田弘が、水木洋子の発表を田村桂子が書いた。投稿・エッセイは袁葉の「百聞不如一見」。最終ページに第八十三回例会案内を掲載した。

▼平成二十年五月十八日（日）

第八十三回例会は野外例会で、古くから景勝地として知られる福山市・鞆の浦を散策した。鞆の浦は現在、福山市が多くの市民の反対を押し切り、埋め立て架橋を実施しようとして世界的な注目を集めている地域であることから、訪問地として選ばれた。

JR福山駅で集合。まずは同市熊野町にあるフランス料理店で昼食を愉しみ、マイクロバスで鞆の浦へ。対潮楼、太田家住宅、軀まちづくり工房を見学後、夕方、尾道まで瀬戸内海の船旅を愉しんだ。今回のプランナーおよび案内役を務めたのは、当学会の末永航委員。参加者は九名。

《平成二十年六月三十日現在、法人会員四法人、個人会員二百四名（特別会員二名、一般会員百七十七名、学生会員二十五名）》

▼平成二十年七月十日（木）

会報第九十八号を発行。巻頭ページに第二十二回総会・大会のスケジュールを掲載。次ページから陳貞竹、佐々木優の研究発表要旨、竹澤雄三の報告要旨、テルミン奏者・船田奇岑のプロフィールを載せた。投稿ページには范叔如が「愛に国境なし」、袁葉が「軽生する日本人?」、高山博子が「祈り」と題したエッセイを寄せた。

▼平成二十年七月二十六日（土）

第二十二回総会・大会を広島県立美術館・地階講堂で開催した。十時、総会の初めに金田晋会長が挨拶を述べ、議事に入った。平成十九年度の事業報告、決算報告、監査報告がそれぞれ担当委員からなされ、そのまま承認された。引き続き、二十年度事業計画、予算案が発表され、こちらもそのまま承認された。

十時三十分から大会開始。午前中に二つの研究発表①「荻生徂徠における古楽の復元―楽律・楽制・琴学に関する検討―」（広島大学大学院博士課程・陳貞竹）②「オーネット・コールマンの音楽―そのヘテロ性と自由―」（大阪大学大学院博士課程・佐々木優）。

昼休憩後、美術評論家の竹澤雄三が「岡本太郎《明日の神話》広島誘致顛末記」を報告した。続いて船田奇岑が珍しい楽器、テルミンを演奏した。

続いてシンポジウム「アートにおける「記録と記憶」。冒頭で千

代章一郎が基調講演「ル・コルビュジェの記録と記憶について」を行い、パネルディスカッションに入った。パネリストは千代章一郎、柿木伸之、的場智美、吉井章。司会は松田弘が務めた。参加者は四十四名。

▼平成二十年九月四日（木）

会報第九十九号を発行。巻頭言は松田弘の「展覧会ツーリズム」。次ページからは第二十二回大会の報告で、陳貞竹の発表を朝山奈津子が、佐々木優の発表を能登原由実が、竹澤雄三の報告は井野口慧子が報告した。午後からのシンポジウムは富田英夫がまとめた。最終ページに第八十四回例会案内を掲載した。

▼平成二十年九月二十一日（日）

第八十四回例会は広島市植物公園の展示資料館で開催した。前半は染織家、井上三津子によるワークショップ。染色についての講義の後、柿渋で和紙を染めた。後半は中国・山東大学文藝美学研究センター、馬龍潜氏の講演「中国の環境美学の形成と発展について」を聴いた。例会後、希望者は同園のボランティアガイドさんに園内を案内していただいた。参加者は三十一名。

▼平成二十年十一月二十八日（金）

会報第百号を発行。巻頭言は金田会長が「新たな芸術学会に向けて」を執筆。第八十四回例会報告は李恩和が書いた。続いて当学会の改革を推進している金田会長が「年報『藝術研究』を身近なものに！」と題した文章を寄稿。伴谷晃二が、十月三日、四日に開催する「東アジアの現代音楽祭2009 inヒロシマ」作曲家の現在」の予告を掲載し、協力を呼びかけた。今号から始まった新コラム・展覧会評の第一弾として松田弘が「G・S・A展」を書いた。また、袁葉が「中国の新しい風」と題したエッセイを寄せた。最終ページに第八十五回例会案内を掲載した。

▼平成二十年十二月十八日（木）

第八十五回例会を広島まちづくり市民交流プラザで開催した。「個を主張する現代における、個の美しさのあり様を考える」のテーマのもとに、並木通り商店街振興組合理事長 下井良昭氏、ヘアメイクアーティストの坂井由起子氏、広島ファッション専門学校との協力を得て、ヘアメイクの実演、ミニファッションショー、パネルディスカッションを行った。パネリストは下井良昭氏、宮森洋一郎氏（建築士）、出本正彦氏（ファッションデザイナー）、坂井由起子氏、大橋啓一。参加者は三十一名。

▼平成二十一年一月十三日(火)～十八日(日)

広島芸術学会芸術展示「制作と思考」第七回展をエネルギー文化・スポーツ財団の助成を受けて開催した。テーマは「けはひ(気配)」。

出品者は当学会の作家会員四十二名で、会場の広島県立美術館・県民ギャラリーは会期中、千三百七十二名の入場者で賑わった。

▼平成二十一年三月三日(火)

会報第百一号を発行。巻頭言は水島裕雅の「栗原貞子記念平和文庫の開設と広島文学の研究」。第八十三回例会(野外)を米門が、第八十五回例会報告を大山智徳がまとめた。倉橋清方が、『会則案』と『藝術研究』編集部会の設置並びに投稿等に関する規定案について』と題し、委員会で取り組んでいる会則修正案を掲載した。最終ページに第八十六回例会案内を掲載した。

▼平成二十一年三月二十一日(土)

第八十六回例会をワークピア広島で開催した。研究発表の一つ目は、広島大学大学院准教授、西原大輔の「近代日本工芸と植民地」。二つ目は、東京芸術大学音楽学部教育研究助手(当時)朝山奈津子の「C・リーデルによるH・シュッツの受難曲の演奏実践―19世紀的シュッツの真相―」。参加者は十六名。

▼平成二十一年四月二十五日(土)

会報第百二号を発行。巻頭言は寺内大輔の「密かな音楽の愉しみ」。

第八十六回例会報告は、西原大輔の発表を伊藤奈保子が、朝山奈津子の発表を朝山自身が書いた。最終ページに第八十七回例会案内を掲載した。

▼平成二十一年五月十六日(日)

第八十七回例会は野外例会で、島根県大田市にある世界遺産・石見銀山遺跡を訪れた。大山委員の知り合いで、現地にお住まいの山崎一功氏にコーディネートをし、案内をボランティアガイドの山本美恵子氏にお世話になった。参加者はゲストを含め十七名。

(文中、当学会会員の敬称は略させていただきます)

《平成二十一年六月三十日現在、法人会員三法人、個人会員百九十七名(特別会員二名、一般会員百七十六名、学生会員十九名)》

(こめかど・きみこ 広島芸術学会事務局)